

昭和21年6月7日付

谷口直枝子宛吉田茂書簡

すえこ

【釈文】

拜啓、其後何日と

なく御不沙汰ニ相過

変転激敷当節、

如何被為候哉と存

罷在候処、先以而

御無事御疎開

の趣拝承仕、誠ニ

大慶至極ニ奉存候

然る処、御次男様

御戦死之趣、嘸かし

御嘆きの事と奉拝察候

又、今回の事、小生とし而ハ

全く思懸けも致さぬ

事ニて、自ら量らさる

不届の事と朝夕

自責焦心罷在、唯々

大過なきを祈念

罷在候、不取敢御返

事迄、乍末筆晩春

折角御身御大切ニと

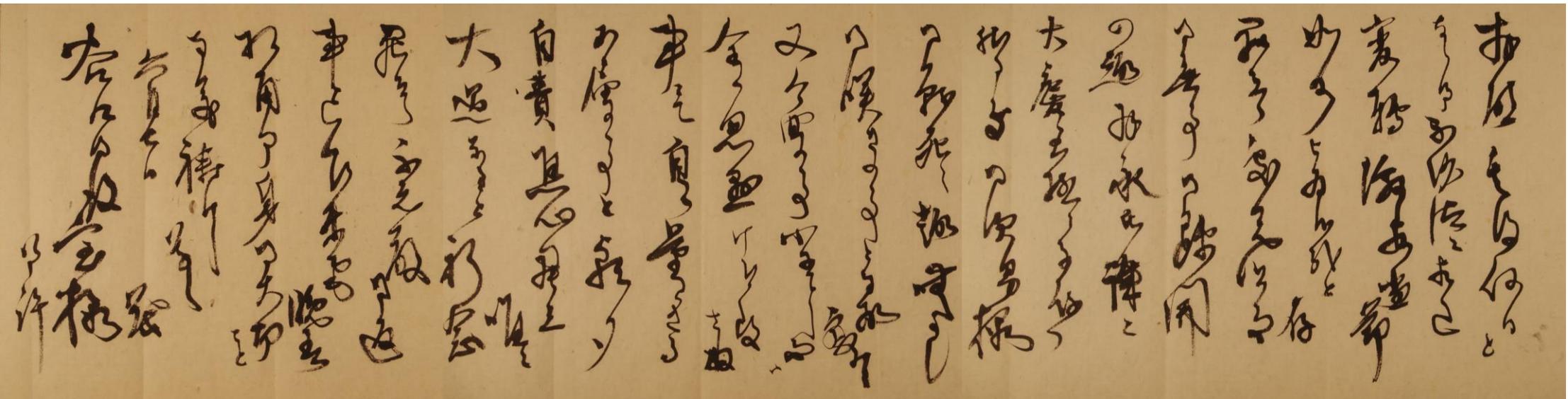
奉万禱候 草々

六月七日

茂

谷口御後室様

御許



【書き下し文】

拝啓、其後何日と
なく御不沙汰に相過ぎ
変転激しき当節、
如何いかが為なされ候そうろうやと存じ
罷まかり在あり候ところ処、先まず以もて
御無事御疎開の趣はいしょうつかまつ拝承 仕り、誠に
大慶至極に存じ奉り候たてまつ
然しかる処、御次男様御
戦死の趣、嘸さぞかし
御嘆きの事と拝察奉り候
又、今回の事、小生としては
全く思懸おもいがけも致さぬ
事にて、自みづから量はからさる
不届の事と朝夕
自責焦心罷り在り、唯ただただ々々
大過なきを祈念
罷り在り、取とり敢あえず御返
事迄まで、末筆ながら晩春
折角御身御大切にと
万禱ばんとう奉り候 草々
六月七日 茂
谷口御後室様

御許

【現代語訳】

拝啓、その後何日もご無沙汰に
過ぎ目まぐるしく変化するこの
頃、いかながなされているかと
思っておりますところ、何は
ともあれ無事に疎開されたとの
ことをお聞きし、この上なく喜
ばしいことと存じます。
ところで、ご次男様が戦死され
たとのこと、さぞお悲しみのこ
とと拝察申し上げます。
また、今回のことは、私として
は全く思いがけないことで、自
分では思い量ることもできず、
行き届かないことといつも自分
を責め、思い煩っております。
ただただ大過のないことを祈念
しております。とりあえずお返
事まで。末筆ながら晩春十分気
を付けてお身体お大切に祈り
上げます。草々

六月七日 茂
谷口御後室様

御許

【手紙の形式について】

① 頭語

② 時候の挨拶

③ 本文

④ 結語

⑤ 月日

⑥ 差出

⑦ 宛先

⑧ 脇付け

手紙には基本的な形式があり、くずし字で書かれた手紙でも、形式を手掛かりにある程度読み解くことが可能です。現代の私たちが手紙を書く際のルールと吉田の時代のそれとは共通している部分も多い一方で、現代では使われなくなった言葉もしばしば登場します。ここでは、一般的な手紙の形式を説明しつつ、吉田がよく使用していた用語もあわせてご紹介します。

① 頭語（とうご）

手紙の冒頭に来るのが頭語です。今回は「拝啓」から始まっていますが、返信の場合には「拝復（はいふく）」も用いられます。ほかに吉田の手紙では、「肅啓」や「前略」も見られます。

② 時候の挨拶

一般的な手紙の形式としては、頭語のあとに「向暑の候、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます」などと時候の挨拶が続きます。ただし、吉田の手紙では、形式的な時候の挨拶は省略される場合が多く、頭語のあとすぐに本題に入ることもしばしばです。今回の場合は、「其後何日となく御不沙汰ニ相過」から始まり、「誠ニ大慶至極ニ奉存候」までが挨拶文といえるでしょう。このほか、よく吉田の手紙で散見されるフレーズとしては、「御書難有拝読」と手紙への礼を述べているものや、「過日ハ御光来被下難有奉存候」と来訪の礼を述べているものなどがあります。

③ 本文

本文の書きだしは、現在では「さて」などから始まりますが、当時は「扱而（さて）」のほか、「陳者（のぶれば）」がよく用いられていました。「陳者」とくると、ここから本題が始まるという目印になります。今回の場合は、「然る処（しかるところ）」という接続詞で始まっています。ここでは「ところで」の意味で用いられ、話題の切り替えに使われています。

④ 結語（けつご）

頭語で「拝啓」とくると最後に結語で「敬具」と付くルールは現在の私たちもよく用いるものです。吉田は、「敬具」のほか、「草々」「頓首」あるいは「匆々（そうそう）敬具」「匆々不（そうそうふいつ）」などの言葉を用いています。

⑤ 月日

吉田の手紙の場合、基本的に年は入らず、月日だけが記されるパターンがほとんどです。

⑥ 差出

吉田の手紙の場合はここに「吉田茂」と入ります。「茂」と名前のみの場合もあり、今回は後者のパターンです。

⑦ 宛先

宛先の氏名に加え、既婚女性には「御後室（ごこうしつ）様」「御奥（おんおく）様」、男性には「老台（ろうだい）」「老兄（ろうけい）」と敬称が付く場合があります。通常は「老台」「老兄」は年長の男性の敬称ですが、吉田より年少の人物にもしばしば用いられています。

⑧ 脇付け

脇付けは手紙の宛先に添えて、敬意を表します。今回の谷口夫人宛の手紙の場合は、高位の夫人を敬う「御前（おんまえ）」「御許（おんもと／おもと）」が頻繁に使用されていますが、男性に宛てて書く場合は「侍史（じし）」「侍曹（じそう）」を用います。

【内容解説】

今回ご紹介するのは、当館が所蔵している谷口直枝子宛の吉田茂の手紙のなかでは、最も古いものです。手紙の日付は、昭和21年6月7日。吉田が第一次吉田茂内閣を組閣したのが同年の5月22日で、今回の手紙は、吉田が総理大臣に就任した直後に書かれたものということになります。ですので、手紙のなかで「今回のこと」（現代語訳の下線部）とあるのは、吉田の総理大臣就任を指すと考えられます。続く文面で、「私としては全く思いがけないことで、自分では思い量ることもできず、行き届かないことといつも自分を責め、思い煩っております」とあり、突然の重責に戸惑う吉田の気持ち率が率直に記されています。

谷口直枝子は当時、千葉県の我孫子に疎開しており、吉田の手紙の文面にも「何はともあれ無事に疎開されたとのことをお聞きし、この上なく喜ばしいことと存じます」とあります。谷口夫人の疎開先は、大正2年から10年まで、夫人の弟である柳宗悦（やなぎ・むねよし）も住んでいた住居で、邸内に三本の大木があることから「三樹荘（さんじゅそう）」と呼ばれていました。柳宗悦が暮らしていた当時の我孫子は、志賀直哉や武者小路実篤など、白樺派の作家たちが集まり、交流の場となりました。吉田のほかの手紙を読むと、谷口夫人を通じて、柳宗悦や白樺派の面々と吉田が交流していたことがわかります。